

※解答はすべて解答用紙に記入しなさい。問いに字数の指定がある場合は、句読点や記号も一字に数えて解答すること。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

数年前から、日本では15歳以下の子どもの数より飼われている犬猫の数が上回ったといわれている。犬猫以外にもモルモットや小鳥、亀、金魚など多種にわたるペットがいる。日本は世界でも有数なペット大国となった。

一方で、日本はロボット大国としても知られている。人間の代わりに重い荷物を運ぶ産業用ロボット、深海や地雷など危険な場所で働く探索用ロボット、診療や手術を補助する医療用ロボットなど、さまざまな用途で開発され、すでに実用化されているものもある。最近ひとときわ注目をアびているのがヒューマノイド(人間型)ロボットだ。

パナソニックのエボルタ電池を搭載した手のひらサイズのミニロボットは、アメリカのグランドキャニオンの登頂に成功した。乾電池の性能を証明する試みだったが、見ている私たちは、ロボットがロープを登るたびにがんばれと声援を送りたくなつた。このロボットを製作した高橋智隆氏によると、これからはロボットに仕事をしてもらうのではなく、ペットのようにつき合えるヒューマノイドの時代だという。直立二足歩行をするホンダのアシモも、人間と協調しながら動くヒューマノイドロボットに変身しつつある。

ロボットは20世紀初めに化学的合成人間として登場し、その後主体性を人間に委ねる機械として定義されるようになった。アイザック・アシモフのロボット三原則(人間への安全性、命令へのフクジユウ、自己防衛)は有名である。それが時代を経て、人間に愛護される対象として生まれ変わろうとしているのだ。

私は、ペットや動物とロボットは対極的な存在だと思う。動物は人間とは姿形が違うし、コミュニケーションの方法や求めていること、理解の仕方も異なる。それでも私たちは動物に話しかければ、彼らなりの方法でそれにこたえてくれるはずだと思いきこんでいる。単に私たちが彼らの反応を勝手に解釈しているだけかもしれないが、それを証明するのは難しい。それに、そんなことを確かめなくても支障はない。ペットと共存できていれば、私たちは満足感を覚える。

ロボットは正反対だ。人間がつくつたから、人間の計算通りに動いてくれなければ困る。仕事を効率よく安全に進めるために、不満を言うことなく、同じことを何度でもくり返してくれる。融通は利かないが、人間の望む通りに改善し動かすことができる。だから、その前で人間は不安を抱かない。何トンもあるトラックが目の前に迫ってきたり不安を感じないのに、ゾウが目の前に迫れば恐怖にかられる。それはゾウの心が読めず、人に慣れていても何をするか完全には予測できないからだ。ヒューマノイドはいくら外見が人間に似ていても、機械である限りそのような不安を覚えずにすむ。ロボットは動物のような命や魂をもっていないからである。

その常識がどうやら変わりはじめた。今、動物の姿をしたロボットたちが人間の世界で活躍しはじめている。イヌのAIBOやアザラシのパロは、安全で手間のかからないペットとして人々の心を癒やしている。ヒューマノイドがそういった特徴をもつて人間の世界に入ってくるかもしれない。現代の技術では、人間の語りにロボットが反応するだけでなく、人間に語りかけてくれることも可能だそう。人間のしたいことを先回りして提案してくれるものもできつつある。ネット上のマーケットのように、その人の過去の注文にもとづいて次に求めるものを提案してくれるのである。

ペットの動物とロボットとの溝は急速に埋まりつつある。ひょっとしたら、子どもの代わりにロボットをもつ人が増えるかもしれない。ロボットはいつまでも子どもでいてくれるし、不満を言わずに介護までしてくれるからだ。

しかし、ロボットと動物の違いは重要だと私は思う。生物は自分が生きるために自己主張をし、成長し、やがて死んでいく。私たちに制御できない自然の営みだ。それに寄り添い、共感することで、自分も生物であることを実感する。動物を完全には操作できないから、その主張を認め、相手を信頼しようとする。その心の動きは相手が人間であっても同じことだ。

ヒューマノイドの登場は人間が今、自己主張せずに気遣ってくれるパートナーを求めていることを示唆している。ただそれは、ロボットを人間にするのではなく、人間のロボット化、機械化を意味してはいないだろうか。

最近の人工知能(AI)ブームは、人間のロボット化を加速しているような気がする。人工知能は膨大なデータを

瞬時に分析することができ、深層学習によって必要なソフトを自動的に探しあて、適切な分析方法を考案することができる。今、さまざまな場所で利用されつつあり、生活は効率的に便利になってきている。それは喜ばしいことだが、同時に人間がAI的になってきていることが危惧注(1)されているのだ。

AIを東大に入学させようとする「東ロボくんプロジェクト」を実施してきた新井紀子あらいのりこさんは、AIは文章の意味を理解することが苦手だという。ある言葉にまつわるこれまでのデータを検索し、それが使われてきた文脈に沿って解答するので、その言葉が使われているその文章の意味を読んでいくわけではないからだ。たとえば、おいしいイタリアンレストランを教えると質問し、その後でまずいイタリアンレストランはと問うと、同じ場所を答えるという。レストランを探すとき、「まずい」という言葉がほとんど使われないので、「うまい」場所注(2)に収斂しゅうれんしてしまうのである。⁽⁴⁾驚いたことに、日本の中高生にAIの苦手な質問をしてみると、かなりの割合で誤って答えてしまうという。これは、子どもたちの頭脳がAI的になっていくせいでと新井さんは言う。文章の意味を考えずに、言葉を検索して頭のなかで個々の属性だけをつなぎ合わせているのである。これでは、せっかく「思考力・表現力・判断力」を向上させようとして記述式の試験を導入しても、成績は上がらない。読解力が低いままに大学で高等教育を受けても、知識も技術も身につけることはできないと新井さんは嘆く。

これは、人間が言語を手にして以来、⁽⁵⁾脳の中身を外部化してきた当然の、しかし大いに危惧すべき結果なのではないかと私は思う。

言語は、環境を名づけ、それをもち運びせずに他者に伝える効率的なコミュニケーションである。見えないものを見せ、現実にはないものを想像させて、人間に因果的な思考や抽象的な概念をもたらしした。文字は言葉を化石化させて時間や空間を超えて伝達できる道を開き、電子メディアの登場は画像や映像の技術をカクシンして、人間の視覚と聴覚の世界を急速に拡大した。これらの過程を通じて、人間はそれまで脳にとどめておいた記憶や知識を外部のデータベースに収納し、そこにアクセスさえすればいつでも利用できるシステムを構築したのである。

少し前まで頭で覚えていたことが、今ではスマホのなかに納まっている。友人の電話番号も、地理情報もこういったデータベースに頼らざるを得なくなっている。生まれたときからスマホを手に行っている子どもたちは、こういったICT社会に慣れてしまっている。そのうち、データを利用して考えることさえも、AIに任せてしまうようになりはしないだろうか。文章を読解する能力をもたなくても、AIさえあれば生きていける。でもそうなったとき、人間は動物ではなくロボットに近い存在になっているのではないだろうかと私には思えるのである。

(山極寿一「ゴリラからの警告『人間社会、ここがおかしい』」による)

注(1) 危惧：ある物事の結果を心配し恐れること。

注(2) 収斂：一つにまとめること。

問一——線部①・②・③のカタカナを漢字に直し、④の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二——線部(1)とありますが、これらは人間との関係からみると、どのような機械に分類されますか。本文中から十二字で探し、抜き出して答えなさい。

問三——線部(2)とありますが、それは人間が「動物の姿をしたロボットたち」のどのようなところに魅力を感じているからですか。「ロボット」、「動物」の特徴をふまえて七十字以内で説明しなさい。

問四——線部(3)のように筆者が述べるのはなぜですか。それを説明した次の文の1・2に入れるのに適当な言葉を本文中から探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

ロボットと動物との違いが消滅すると、人間が生物の自然の営みに自分を重ねて1
ことになくなり、生きた相手の意思を受け入れ信頼するという2
を失うことにつながると考えられるから。

問五——線部(4)とありますが、ここでの「AI的」とはどういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分にとって都合の良いコミュニケーションしか受け付けないということ。
- イ 自分自身で考えたり判断したりすることを苦手としているということ。
- ウ 多くの情報を記憶し、個々の属性によって分類することができるということ。
- エ これまでの経験から判断して答えを導き出そうとすることがあるということ。

問六——線部(5)とありますが、このことに最もよく関わっている言語の側面を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 言語は事物に名前を付け、その事物がその場になくても他者に指し示すことができる。
- イ 言語は言葉を通じて事物を想像させ、抽象的な思考を可能にする。
- ウ 言語は、音声によって効率よく情報を伝達し合うことができる。
- エ 言語は文字によって膨大な情報を蓄積し、いつでも利用できる。

問七 本文を読んで生徒が話し合いました。筆者の考えに合うものを次の中から一つ選び、生徒の番号で答えなさい。

- 生徒1 危険な作業や時間のかかる高度な処理が安全に迅速にできるので、ロボットが人間に代わってできるところがどんどん増えてきているのはいいことだと思います。
- 生徒2 増えるのはいいことだと思いますが、チエスの大会でロボットが対戦相手の子どもの指を挟んで怪我をさせるという事故も起きているので、ロボットを制御する技術をもっと向上させる必要があると思います。
- 生徒3 技術が向上するのはいいけれど、人間の仕事をロボットが奪うことになって将来的に失業する人が出てきたら困ります。機械と人間との住み分けをしないとダメだと思います。
- 生徒4 人間は自分たちに便利な物をたくさん生み出してきましたが、作り出した物によって人間としての大事な特性を損なわないようにしないとダメだと思います。
- 生徒5 人間も動物と同じ生き物だということを忘れないようにしないとダメです。機械は機械でしかないのでも、暴走しないよう人間が正しく使いこなすことが大事だと思います。

二 次の△文章ⅠⅤ、△文章ⅡⅤは、「金曜日のヤマアラシ」という物語の二つの場面です。△文章ⅠⅤは物語のはじめのほう、△文章ⅡⅤはおしまいのほうにあります。読んで後の問いに答えなさい。

小学六年生のウタは、二年前に母親を亡くして、父親のさくちゃんと二人で暮らしている。ウタのクラスに桐林敏という男子が転校してきたが、態度がとげとげしいことから、家で話題にするときには「ヤマアラシ」とあだ名で呼ぶことにした。さくちゃんはおもちゃの動物フィギュアの原型をデザインする仕事をしていて、「ヤマアラシ」に関心を示している。

△文章ⅠⅤ

さくちゃんが、初めてお母さんのエプロンをつけてキッチンに立ったのは、お母さんのお葬式の次の日のことだった。一八〇センチの体に、赤のギンガムチェックはびっくりするほどにあわなかった。でもそんなことはおかまいなしに、さくちゃんはまな板の上のキャベツを、ザクザク切った。そして紙に書いたなにかを何度もチラチラたしかめながら、背中をまるめ、おなべをのぞいていた。

四年生になったばかりのわたしは、それをうしろから見ている。ただぼーっと、見ているだけだった。なみだはもう、一滴も残ってはいなかった。

できあがったのは、春キャベツのスープだった。鼻を近づけたら、心の奥がカサツと音をたてた。

(これ、春になるたびにお母さんが作ってくれてたやつだ)

コシヨウがきつくて、わたしはひと口飲んでむせた。さくちゃんは何度も、「ごめん、ごめん」とあやまった。

春キャベツは煮^にすぎて、すっかり形がなくなっていた。コシヨウにむせながら、わたしはそれを口に運んだ。牛乳とバナナしか食べられなくなっていたわたしの体に、キャベツのあたたかさが、少しずつしみていった。

「おかわり」

お皿をさし出したときに見せたさくちゃんのホッとした表情を、たぶんわたしは一生わすれない。

二年前、あのエプロンの赤い色は、今よりずっとあざやかだった。⁽¹⁾色あせた赤は、さくちゃんがわたしのためにごはんを作ってくれた日々を表している。

⁽²⁾もくもくとパエリアをほおばったわたしは、最後に一番大きなムール貝を、貝からはがして口に入れた。

「はあ、おいしい」

そうもらしたしゅんかん、さくちゃんが言った。

「で、どうだった、今週のヤマアラシは？」

「え？」

ははあ、わかった。⁽³⁾今日がパエリアだったのは、そういうわけか。

わたしは、ムール貝の内側に、とれずに残ってしまった白い小さな貝柱をフォークでつつきながら考えた。

先週の金曜日、さくちゃんの頭にうかんだヤマアラシのポーズがどんなものを聞いたとき、さくちゃんはこたえるのをやめてこう言った。

「この先、⁽⁴⁾敏くんのイメージが変わっていく。そんなことが、あるかもしれない」

イメージが変わるってことは、またそのあとに新しい情報が加わるってことだ。つまりさくちゃんは、ヤマアラシの様子をわたしから聞きだすため、わざわざこうして手のこんだパエリアを作ったってわけか。

でも、なんで？

さつき『今週のヤマアラシ』って言ってたけど、これから毎週、金曜日が来るたびに聞くつもりなんだろうか。

「敏くん、少しはクラスにうちとけてきたか？」

「いや、ぜんぜん」

ムール貝の貝柱は、まだはがれない。わたしは、貝柱と格闘^{かくとう}しながらこたえた。

「ヤマアラシはあいかわらず、イライラのかたまりだよ」

そう言うわたしも、がんこにくっついたままの小さなかたまりに、少しイライラしてきたところだった。だめだ、とれない。

わたしはとうとう、手に貝を持って、前歯でガリガリやりはじめた。

「ムール貝も、そこまできれいに食べてもらったら本望^aだな。でもなウタ、それは家以外ではやらないほうがいいぞ」

さくちゃんは、かわいいそうなものでも見るような目で言った。

「わかってる」

わかっているけどわたしは、ここまでしないと気がすまない。ペリカンマンゴーだって、種のまわりについている果肉は、可能なかぎりこそげとる。

「じゃあ敏くんは、いまだにクラスで孤立^{こりつ}してるのか？」

「まあね。あ、でも昼休みは、クラスの男子といっしょにサッカーしてるみたい」

「ふーん」

「プロのサッカー選手、目指してるんだってさ」

「へえ」

「プロになるって、むずかしいよね？」

「かんたんじゃないだろうな」

さくちゃんは、どこかうれしそうな顔でこたえた。

わたしの頭に、今日の放課後のことがうかんだ。

「今日、ぐうぜん見たんだけどさあ。ヤマアラシは、リ、リ……あれ？」

ホノカちゃんと言っていた専門用語が思い出せない。わたしはムール貝をお皿にもどすとイスから立ちあがり、「なんだっけ？ ほら、こんなふうに脚でボールをポンポンやるやつだよ」って言いながら、両脚を動かしてみせた。

「リフティング、だな」

「そう、それぞれ！ ヤマアラシは、そのリフティングがすごくうまかった」

「へえ、そうか」

「どのくらいうまかってね、こととか、こつとかこつち側でボールをけるんだけど、ちゃんとボールがまっすぐ上にあがって、いつも体の中心にあるんだよ」

わたしは、足の甲、内側、外側と順に指さしながら説明した。

「それは、基本がしっかりできてることなんだろうなあ」

「ホノカちゃんのお兄ちゃんの、百倍うまいらしいよ」

わたしはイスに座りながら、「ま、でもよくわかんないけどね」としぶい顔をつけ加えた。

さくちゃんは、少し身を乗り出した。

「リフティングって、いったい何回くらいできるもんなのかな？」

「さあ。今日見たときは一〇回くらいだったけど」

「でもきつと、もつとたくさんできるんだろうな」

わたしがだまっただままでいると、さくちゃんはまた、「一〇〇回とか、二〇〇回。いやそれ以上かなあ」とつぶやいた。

金曜日の夜は、いつもより少しおそくまでおきている。時間を気にしないで本を読んだり、お気に入りのノートにイラストだとか詩みたいな言葉をこつそり書いたりして、過ごす。

でも今夜は、そのどれにもうまく集中できなかった。

原因はたぶん、今日の帰りに見たヤマアラシのうしろ姿だ。

心の中で、黒っぽいものがユラユラゆれていた。まるで、静かだった池の底が、とつぜん投げこまれた小石のせいで、たまったドロがまい上がっていくように。

わたしは机の上のフォトフレームを、手にとった。バリ島のホテルの窓辺、日に焼けた顔でお母さんが笑っている。でもその笑顔は、にごったユラユラで見えなくなっていく。

⑥ 二年前のあの日、病室から帰っていくわたしのうしろ姿を、お母さんはどんな顔で見っていたんだろう。

背中が、ヒリヒリいたかった。

わたしは、フォトフレームをだきしめながら、「ごめんね」とくり返し、池の底のにごりがおさまるのを待った。

文章Ⅱ

お母さんが入院した総合病院は、家から歩いて十五分くらいのところにあった。

手術から一週間ほどして、ふたり部屋に移ったお母さんがわたしに言った。

「ウタの顔、毎日見たいな」

「じゃあわたし、毎日、放課後に会いに来る」

次の日からわたしは、毎日、病院に行くようになった。お母さんのベッドのわきで宿題をしていると、「四年生の勉強って、けっこうむずかしいんだね」なんて言いながら、お母さんはうれしそうだった。

お母さんに会えるのは、わたしだっとうれしかった。
でも……。

わたしは、入院病棟がきらいだった。それは、あまりにふつうの生活とちがっていたからだ。薄暗い廊下、消毒薬のにおい、看護師さんがおして歩く医療器具のカチャカチャという音、腕から管をぶら下げて歩くおばあさん。

入院しているお母さんだって、そうだった。毎朝、勤め先の会社まで、さっそうと自動車で通勤したり、エプロン姿で家の中を走りまわっていたお母さんではなくなっていた。病院のパジャマみたいなものを着て、弱々しくて、笑っていても悲しそうに見えた。

わたしが行くと、「ほら、ウタの好きなゼリーだよ」なんて言いながら、病院の売店で買ったおやつをくれたけど、本当はわたし、消毒薬のにおいが気になって、あまり食べたくなかった。いつも無理して食べていた。

それでもやくそくしたから、毎日病院に行った。
だけどある日、学校の図書室でずっと読みたかった本を見つけた。羅針盤を持った女の子が、北の国へ冒険の旅に出る話だ。昼休みに少し読んだらすごくおもしろくて、早く続きが読みたくなった。自分の部屋で、何にもじゃまされず、その物語の世界に入りこみたくなった。

だからその日、わたしは病院に行つてすぐ、お母さんに言った。

「あ、あのね。今日は友だちと遊ぶやくそくをしちゃったの。だから今日は、もう帰っていい？」

言いながら、お母さんの目は見られなかった。

お母さんは、やさしい声で「うん、いいよ」って言った。

そしてベッドから起きあがって、廊下まで出て見送ってくれた。

「ウタ、気をつけて帰るのよ」

ふりむくと、お母さんは手すりにつかまって、手をふっていた。短く手をふり返してから、わたしは前をむいて早足で歩いた。

痛かった。お母さんに見られているうしろ姿が、チクチクと痛かった。

(蓼内明子「金曜日のヤマアラシ」による)

問一——線部 a・b の説明として適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 本望だ

ア 真心をこめて感謝を示す

ウ うらみを忘れられる

b 身乗り出した

ア 興味をもつ気持ちを表す

ウ うれしい気持ちを表す

問二——線部(1)の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 洗濯で色あせていくエプロンを見て、母親の思い出も薄れていくことをウタが寂しく思っているということ。

イ 母親のエプロンを父親が毎日着ることで古びてしまったことをウタが気にくわないと感じているということ。

ウ 料理のできなかった父親が一生懸命に飯作りを励んできた時間の重みをウタが大事に思っているということ。

エ 時間とともに父親のエプロン姿が板につき、料理の腕も上がってウタがうれしいと感じているということ。

問三——線部(2)とありますが、ここより前の「二年前の食事の様子」と、ここ以降の「現在の食事の様子」が並べて描かれていることで何が読み取れますか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア ウタの食事のしかたが以前より下品になって、父親が情けなく思っていること。
- イ ウタが父親のつくる食事に満足している気持ちを、父親に伝えようとしていること。
- ウ ウタが食欲旺盛で好き嫌いのない、健康優良児に育ったこと。
- エ ウタが食欲をみせて、元気な日常生活を取りもどしていること。

問四——線部(3)とありますが、さくちゃんがパエリアを作った理由をどのように理解したのですか。それを説明した次の文の

さくちゃんがパエリアを作ったのは、からだと理解した。

問五——線部(4)とありますが、前回までの「敏くんのイメージ」はどのようなものだったのですか。本文中から二点探し、それぞれ九字で抜き出して答えなさい。

問六——線部(5)とありますが、写真の中の母親の様子と対照的な様子を表現している一文をハ文章ⅡVから探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問七——線部(6)とありますが、「背中のいたみ」はウタのどのような気持ちの表れですか。ハ文章ⅡVをふまえて、七十字以内で説明しなさい。

問八 本文について述べた次の感想のうち、読み取った内容としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、生徒の番号で答えなさい。

- 生徒1 父親と娘がユーモアのある会話をしている、仲の良さがうかがえます。父親が娘に食事を作るシーンには娘への愛情を感じます。
- 生徒2 ウタは積極的に自分から父親にヤマアラシの話をしています。彼のサッカーのうまさを語っているところは、ジェスチャーを交えていて、ウタの得意気な様子が目にうかびました。
- 生徒3 病院まで大好きな母親に会いに来るけれど、ウタには今の状態に慣れることのできない強い違和感もあって、毎日それに向き合うことはつらかったと思います。本の世界に一人で没頭しようとしたときに、友だちとのやくそくを持ち出したのは、お母さんを傷つけない気持ちもあったのだからと思います。
- 生徒4 ウタは、二年前に病室から帰る自分のうしろ姿が母親にどのように見えていたのかを気にしています。本文に「今日の帰りのヤマアラシのうしろ姿」が原因で心の中が黒っぽくなった、という箇所もあって、二人のうしろ姿には、何か関連があるように謎っぽく書いてある気がしました。

三 次の各問いに答えなさい。

(I) 俳句と短歌について授業で学習をした中学生の妹尾さんが、発展学習の課題として自分の好きな俳句と短歌の鑑賞文を書きました。次の鑑賞文中の 1 5 に入れるのに適当な表現を、自分で考えて答えなさい。

蒲公英やローンテニスの線の外 子規 (明治三十一年 初出)

たんぽぽの綿毛を吹いて見せてやる
いつかお前も飛んでゆくから 俵万智 (出典 小学館「たんぽぽの日々」)

わたしはタンポポが好きなので、タンポポが入っている俳句と短歌を選びました。

俳句の季語「蒲公英」の季節は 1 です。ローンテニス芝のコートで行うテニスを指しています。

作者の正岡子規は明治時代に活躍した人で、野球が大好きなことで有名ですが、スポーツ全般が好きだったのでしょう。まだ明治時代は日本にテニスが入ってきてきてまもないころです。場所は整備も完全じゃない、できたばかりのコートかもしれません。 2 色で引かれた線と、緑の芝生、タンポポの黄色が目には鮮やかに浮かんできます。もしも 3 ならば、じゃまなタンポポは、むしり取られていたはずですが。あるいはプレイヤーに踏まれていたにちがいありません。それをまぬがれる絶妙な位置に咲くけなげなタンポポを発見し、作者はふと優しいなごんだ気持ちになったのだ、と思います。

短歌には倒置法が用いられています。だから 4 のあとに句点(。)を打つことができます。作者の俵万智さんがこの作品を作ったのは、子育て中するとき。綿毛を飛ばす遊びを教えながら、その綿毛が 5 に重なって見えたのだと思います。いつか離れるときを想像して切なく感じながら、でもそのときはしっかりと背中を押して送りだそうという気持ちがこめられていると感じました。

(II) 次の各問いに答えなさい。

問一 次の①～③について、二つの文の [] に共通して入る言葉を、下の語群から選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 彼は蕎麦を [] 食べている。
彼は後悔を [] 引きずっている。

② 水は [] わき出た。
父は [] 説教した。

③ 妹が [] 泣き始めた。
腹が [] 痛み始めた。

- | | |
|---|-------|
| ア | こんこんと |
| イ | さらさらと |
| ウ | しくしくと |
| エ | ずきずきと |
| オ | ずるずると |
| カ | つるつると |
| キ | めらめらと |
| ク | ぺらぺらと |

問二 次の□に、対になる漢字一字をそれぞれ入れて、対義語を完成させなさい。

例 向上 □ ↑ ↓ 低下 □

- ① □ 進 ↑ ↓ □ 退 ② □ 純 ↑ ↓ □ 雑

